

論文の要旨

ふりがな 氏名	重松 恵梨
論文題目	Authenticity and Creation of Selves in Defoe's Fictional Autobiographies: Representation of Consciousness in Retrospective Narratives (デフォーの自伝フィクションにおけるオーセンティシティと 自己の創造 -回想物語の意識描写-)
<p>論文の要旨</p> <p>本論文では、18 世紀初期の英国人作家、ダニエル・デフォーの自伝フィクションにおけるオーセンティシティと自己の創造のための語りの技巧を議論する。デフォーの自伝フィクションの重要なテーマの一つは、自己の概念 (the ideas of the self) の表現 (representation) であり、それは様々な語りの技巧を通して読者に伝えられる。本論文では、18 世紀初期の文学におけるオーセンティシティ (authenticity) の概念に着目し、デフォーが創り出すオーセンティシティは、語りの形式の慣例性 (conventionality) 及びリアリズム (realism) の観点から議論する必要があることを述べ (第一章)、オーセンティシティの効果を生み出す様々な語りの技巧を、意識描写 (consciousness representation) を中心に、物語論的・文体論的視点から分析する (第二～三章)。デフォーがこれらの技巧を通して描く自己の概念が、作品を経るにつれていかに変化していくかを記述し、デフォーの自伝語りの発達を論じる (第四～五章)。</p> <p>第一章では、デフォーの自伝フィクションにおけるオーセンティシティの重要性を議論する。デフォーがフィクション作家として活躍した 18 世紀初期は、「作り話 (story)」は価値が無く「実話 (history)」のみが価値あるものとして評価されていた時代であり、そのような時代の文学において、語りのオーセンティシティは極めて重要な概念であった。18 世紀初期のオーセンティシティは、「経験を生々しく描くこと (verisimilitude)」、そして「物語が実話であると主張すること (truth claim)」の双方が織り込まれた概念である。一方で、経験をリアリズムの技巧を駆使してまるで事実であるかのように描くことにより、語りのオーセンティシティは増す。他方で、当時の読者に馴染みの形式を使い、経験の事実性を主張することによっても、語りのオーセンティシティは効果的に創り出される。語りのオーセンティシティは、従来、前者のリアリズムの技巧の観点から議論されることが多い。しかし、18 世紀の文学では語りのオーセンティシティを作り出す手法として事実性の主張が慣例的に用いられていたという文学的背景を考えると、後者の語りの形式の慣例性にも着目する必要がある。また、リアリズムの中でも、これまでのデフォー研究においては、作中人物の外面的様子を事細かく表すリアリズム (circumstantial realism) に焦点が当てられ、作中人物の内面を表す心理的リアリズム (psychological realism) は軽視される傾向にあるが、本論文では、デフォーの自伝フィクションにおける心理的リアリズムの重要性を指摘する。本章では、デフォーの語りの技巧の先行研究を踏まえ、彼の創り出すオーセンティシティは、心理的リアリズムの技巧を慣例的な語りのスタイルの中で巧みに扱うことにより、上手く機能していることを主張する。</p>	

第二章では、デフォーが好んで使用した語りのスタイル、一人称自伝形式に焦点を当て、デフォーの自伝フィクションにおける一人称自伝形式とオーセンティシティの関係性を考察する。この物語形式は主に、オーセンティシティの慣習的側面との関わりが大きい。一人称自伝語りは、18世紀当時、誰からも親しまれていた形式である。この物語形式では、「私」が自らの経験を思い出して語るという、私たち人間が日記などを書く際にごく自然に使用する現実世界の語りのスキーマを模倣している。そのため、この形式を使うことで、「私」は語られる内容の事実性を主張できる。人が自らの経験を思い出す時、その方法は一つであるとは限らない。認知心理学でも指摘されているように、思い出す内容や思い出す際の様々な心理的要因によって、経験を思い出して語る方法は変化する。本章では、一人称自伝形式における二つの異なる語りのモード（今の時点から観察者のような視点で「語りながら思い出す (REMEMBERING AS RECOUNTING)」語りのモードと、当時の視点に戻って「追体験しながら思い出す (REMEMBERING AS RELIVING)」語りのモード）に着目し、それらがどのようにデフォーの作品で使用され、オーセンティシティを高める効果を発揮しているかを検証する。その際、言語指標として二つのモードにおける異なる時制の使い方（特に現在時制）に着目し、それぞれのモードの特徴を記述する。

一人称自伝形式を使用することで、デフォーは作品のマクロレベルでオーセンティシティを創り出している。第三章では、作品のミクロレベルでデフォーがいかに物語のオーセンティシティを高めているかを明らかにするために、語りにおける意識描写の技巧について考察する。意識描写の様々な技巧を効果的に使用することは、特にオーセンティシティのリアリズム的側面と関係している。虚構世界に映し出される意識が文学作品のどの側面を考察するにも無視できない重要な要素であることは、これまで繰り返し指摘されてきた。そのため、文体論や物語論では、フィクションにおける意識描写の研究は盛んであり、従来、意識描写を分析する理論的基盤として、話法 (speech and thought representation) の枠組みが使用されてきた。しかし、心理学や脳科学で証明されているように、「意識」には、話法で表される「発話」や「思考」といった概念レベルのものだけでなく、「知覚」や「感覚」と言った知覚レベルのものも含まれる。本章では、知覚レベルの意識を描写する方法も考察することで話法の枠組みを見直し、意識描写 (consciousness representation) の枠組みを提唱する。第二章で取り上げた語りのスキーマとの関わりも考慮に入れながら、様々な種類の意識描写の形式、機能、意味、効果について分析し、それらが実際にデフォーの自伝フィクションにおいて、いかに心理的リアリズムを創り出しオーセンティシティを高めているかを例証する。

このように、第二章及び第三章では、デフォーが自伝フィクションにおいて、慣例的な語りの形式の中で心理的リアリズムを実現することで、語りのオーセンティシティを効果的に創り出していることを示し、続く第四章及び第五章では、これらのオーセンティシティを創り出す技巧が使われる際の効果を、デフォーの自伝フィクションの重要な要素である自己の概念の創造との関連から議論していく。デフォーは自伝フィクションにおいて、肉体を伴った具体的な自己（主人公）を通して、より抽象的な自己の概念を創造し、読者に伝えている。第四章及び第五章では、デフォーがそれぞれの作品で描こうとする内容により、語りの中に表現される自己の概念がどのように変化しているかを分析し、デフォーの語りの発達を記述する。

デフォーの自伝フィクションでは、後の作品になるにつれ、物語に描写される主人公の経験が宗教的で霊的なものから世俗的で心理的なものへと変化している。それに呼応するように、表される自己の概念も集合的 (collective) なものから主観的 (subjective) なものへと変わっている。第四章では、描写される経験の集合的な側面を霊的自伝 (spiritual autobiography) との関わりから議論する。霊的自伝の文学的枠組みは、特にデフォーの自伝フィクションの第一作品目である『ロビンソン・クルーソー』に影響を与えている。この作品では、主人公の精神的成長がテーマであり、作品内の個々のエピソードは全て、回心した語り手としてのクルーソーの視点から語られる。霊的性質を帯びた語りは、「一見異なった個々の経験でもそれらが指し示す霊的意味はキリスト教徒万人に共通するものである」という考えのもとに語られているため、この種の語りを通して描写される自己の概念は集合性 (collectivity) を示唆する。18 世紀初期には個人主義が台頭していたとは言っても、そこで認められる個人とは、個人が属する共同体の中で機能するという前提の下にのみ有効であるとする考え方が根強かった。デフォーは、『ロビンソン・クルーソー』において、霊的自伝の枠組みを利用して自己の概念の集合性を描き出している。この傾向は、『ロビンソン・クルーソー』三部作の後に書かれた、『シングルトン船長』にも共通して見られるが、この作品から徐々に、デフォーの自伝フィクションではピカレスク小説 (picaresque novels) の影響が増し、描かれる自己の概念も変化していく。そこで第五章では、描写される経験の主観的な側面をピカレスク小説との関わりから議論する。『モル・フランダース』、『ジャック大佐』、『ロクサーナ』のような後期の作品でも霊的性質は表されているものの、これらの作品は悔い改め回心した語り手の視点から描かれているわけではない。霊的自伝で最も重要とされる「回心」が描かれないことによって、主人公たちの霊的重要性が失われ、語りの集合的側面の重要性が阻害されてしまう。その結果、これらの作品では、世俗的で主観的な側面が主人公の意識を通して描写されるようになる。主人公の心理や内面を描くことは、ピカレスク小説の特徴の一つであり、デフォーはピカロを主人公とすることで、物語を主人公の霊的成長という一貫したテーマではなく、その人物の主観性 (subjectivity) により組み立てていった。語りを通して表現される自己の概念の主観性は、主人公が自身を共同体との関係で定義することを放棄し、自己正当化のために自身の物語を紡ぐ際に顕著に現れる。本章では、デフォーが主人公の精神的成長というテーマではなく、主人公の意識に従って物語を構成していく方向に向かったために、語りの中に創り出される自己の概念が、集合的な自己 (collective self) から主観的な自己 (subjective self) に変化していることを例証する。

本論文では、描かれる自己の概念を、オーセンティシティを創り出す語りの技巧を通して読み解くことが、デフォーの自伝フィクションのより深い理解に結び付くことを例証し、デフォー研究に貢献するとともに、デフォー語りの技巧 (一人称自伝形式、視点、意識描写) の詳細な分析により、物語論や文体論における語りの研究に通時的視点を加え、これらの研究分野を発展させることができることを証明する。

備考 要旨は、日本語 4,000 字以内又は英語 1,500 ワード以内とする。